

【ワクチンについて】

予防接種に使う薬をワクチンといいいます。ワクチンを接種して、免疫(病気)に対する抵抗力、病原体と戦う抗体ともいう)をつくることにより、発病を予防したり、症状を軽くしたりすることができます。ワクチンは病原体であるウイルスや細菌から作られており、その作られ方によって生ワクチン(病原性を弱めた病原体)、不活化ワクチン(毒性をなくし免疫を作るのに必要な成分のみを病原体から取り出したもの)、トキソイド(病原体が作る毒素を無毒化したもの)の三つに分けられます。

最近、話題になっているワクチンについて解説します。

■麻しん(はしか)ワクチンについて

麻しんは伝染力が極めて強いウイルスで、麻しんに感染した人の咳やくしゃみなどで麻しんウイルスが飛び散り、飛沫感染します。多くの場合軽症で治りますが、肺炎や脳炎を起こしますと致命率が高くなる危険な病気です。昨年来、麻しんの流行は、10代～20代の発症者が多く、通学、通勤、社会活動を通して感染を拡大した可能性があり、大きな社会問題になりました。予防はワクチン接種以外にありません。平成18年4月より麻疹と風疹の予防対策を強める為、2回接種が導入されており、日本は2012年までに国内からの麻しん排除を目指しています。予防接種の必要性を再認識していただくことが大切です。

■ Hib ワクチンについて

乳幼児の細菌性髄膜炎を起こす細菌はいくつかありますが、原因の半分以上を占めているのが「インフルエンザ菌b型という細菌で、略して「Hib(ヒブ)」と呼ばれています。Hibは冬

に流行する「インフルエンザウイルス」とは全く別のものです。Hib 髄膜炎にかかると抗生物質による治療が必要になりますが、最近では抗生物質に効かない菌(耐性菌)も増えており、治療が困難になってきています。しかし、平成20年12月からHibワクチンが発売されますので、Hib 全身感染症に対する積極的な予防にその効果が期待されています。

■インフルエンザワクチンについて

インフルエンザウイルスによる感染で、高熱、鼻汁、咳、全身倦怠感などの症状がでます。現在はAソ連型、A香港型、及びB型の3種類による流行となっています。

インフルエンザと“かぜ”(普通感冒)とは、原因となるウイルスの種類が異なり、通常の“かぜ”(普通感冒)はのどや鼻に症状が現れるのに対し、インフルエンザは急に38～40度の高熱がでるのが特徴です。気管支炎や肺炎を併発しやすく、重症化すると脳炎や心不全を起こすこともあり、体力のない高齢者や乳幼児などは命にかかわることもあります。ワクチン接種を行うと、インフルエンザに罹患しにくくなる、あるいは、罹患しても症状の重症化を抑えることができ合併症を併発したり死亡する危険性を抑えること、特に高齢者に対して接種することが勧められています。

なお、新型インフルエンザに関する情報は厚生労働省：健康、感染症情報、新型インフルエンザ www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou.html

又は国立感染症研究所感染症情報センター <http://idsc.nih.gov/index-j.html> をご覧下さい。

(薬剤科長 富澤 達)

くす 通信

第105号
2008年12月1日

乳幼児の髄膜炎とワクチン ワクチンについて



「紅葉」：楓科

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。気楽に読んで健康を守りましょう。

診療時間 8:30~17:00

(診療受付時間 8:30~11:00)

ただし、急患はいつでも受診できます。

(診療科目) 総合医療センター [総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科(腎センター)、神経内科(脳神経センター)、呼吸器科(呼吸器センター)]
心臓血管センター (循環器科、心臓血管外科)、**消化器病センター** (消化器科)、精神科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科(脳神経センター)、形成外科、泌尿器科、産婦人科、**感覚器センター** (眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科)、気管食道科、リハビリテーション科、**画像診断・治療センター** (放射線科)、麻酔科、歯科・口腔外科、**救命救急センター**、人間ドック、脳ドック

診療科の特色：小児科



(小児科 高木一孝)

当小児科では以前から子どもの血液疾患の診療に力を入れています。さまざまな原因でおこる貧血、鼻出血や紫斑で発症する出血性疾患、さらに白血病やリンパ腫などの悪性疾患が含まれます。頻度の多いものではありませんが、いずれも命にかかわる重篤な疾患です。悪性疾患に対しては化学療法や造血幹細胞移植をおこなっています。また近年増加している食物アレルギーに対して負荷試験を実施し、除去食の必要性について評価指導をおこないます。小児の病気で最も多い呼吸器・消化器の感染症や熱性痙攣、喘息など小児疾患全般にわたる診療はもちろん、時間外の入院も常時受け付けています。

【乳幼児の髄膜炎とワクチン】

6ヶ月の赤ちゃんが急に高熱をだし、ぐったりとした青白い顔で病院を受診すると、背中に針を刺す腰椎穿刺という検査で髄膜炎と診断された。このようなケースが熊本県全体で毎年10~15名(全国では500~600名)発生しています。

子どもの感染症のなかで最も重症と考えられるのが髄膜炎(化膿性髄膜炎)です。発熱の子どもを診た場合、髄膜炎だけは見落とすまいと小児科医は常に頭の中にこの病気を浮かべて診察に臨んでいるといってもいいほどです。

原因菌として重要なのが、全体の6割を占めるヘモフィリス・インフルエンザb型(よくヒブと呼ばれます)です。1歳未満の乳児が半数以上を占め、急激な発熱で発症します。痙攣や意識障害を伴い、治療が進歩した現在でも後遺症をきたしたり死亡する子どもが20%に達するという大変怖い病気です。

最近このヒブに対して有効なワクチンが開発され、欧米を初め100カ国以上の国で、すでに使用されています。その結果、アメリカではワクチン導入前と比べるとヒブによる髄膜炎は100分の1以下に激減し、この感染症がすでに過去の病気とさえ呼ばれるようになりました。

ヒブによる感染症は髄膜炎のみではありません。急激な呼吸困難をきたし、生命を脅かす急性喉頭蓋炎(今年熊本市でも死亡例が発生して

います)や敗血症、骨髄炎、肺炎、関節炎などの原因でもあります。ワクチンが有効なことは髄膜炎と同様です。

日本でもやっとヒブワクチンが使用できるようになり、今年の12月ごろから実施される見込みです。実際の方法は初回接種3回、追加接種1回の計4回で、現在おこなわれている三種混合ワクチン(ジフテリア、破傷風、百日咳)と同じスケジュールです。ワクチンにより髄膜炎が予防できれば、夜間の発熱に対してもあわてて救急外来を受診する必要がなくなるかもしれません。

このように大変有効なワクチンですが、料金は自己負担のため(一回7000円)保護者にとっては経済的負担が大きいことも事実です。将来、ワクチン接種に対する公費助成が得られ、多くの子どもが悲惨な病気から開放されることが期待されます。

(小児科部長 高木 一孝)

国立病院機構熊本医療センター

NATIONAL HOSPITAL ORGANIZATION KUMAMOTO MEDICAL CENTER



〒860-0008 熊本市二の丸1-5

電話 096(353)6501(代表)

FAX 096(325)2519

ホームページ <http://www.hosp.go.jp/~knh>